

(5) 江戸時代

江戸時代に入ると、徳川家康によって二条城が築造され、京都における幕府の拠点となり、京都は、内裏（現在の御所）と二条城という二つの政治的拠点を持つことになった。

また、江戸幕府は、徳川家の権威を天下に知らしめるため、戦国時代に荒廃した寺社の伽藍を整備し、寺社の復興に努めた。

一方、交通運輸の面では著しい進展がみられた。京都は内地に位置し、物資輸送という面から陸路に頼らなければならず、大量輸送に不便であった。そこで、商工業の発展の障害であった内陸交通の改善のため、徳川政権に河川開発を依頼された角倉了以は、慶長11年（1606）に大堰川（桂川）を開削し、丹波との木材運搬を可能にした。

更に慶長16年には鴨川に沿って高瀬川を開削し、



写真1-10 高瀬川（一之舟入と高瀬舟（復元））

伏見港から直接水路（運河）による通船を完成させた。それ以降、高瀬川は人と物資の輸送動脈となり、京都の運輸は飛躍的に伸びを示した。

諸街道もこの時代に急速に整備され、京都経済を支えた幹線ということでは、大津からの為登米を運んだ東海道、伏見からの諸物資の搬送路である竹田街道・鳥羽街道、丹波地方からの材木や薪炭が運ばれた周山街道と山国街道をあげることができる。河川開発では、西高瀬川開削が行なわれ、京都に新しい刺激と景観をもたらした。

産業においては、明暦（1655～1657）の頃より、西陣機業の発展はめざましく、元禄元年（1700）頃には、織屋5千軒、機数1万台に達していたとされる。更に、染物、陶器、漆器、銅器など現在に継承されている伝統産業が最盛期を迎えた。

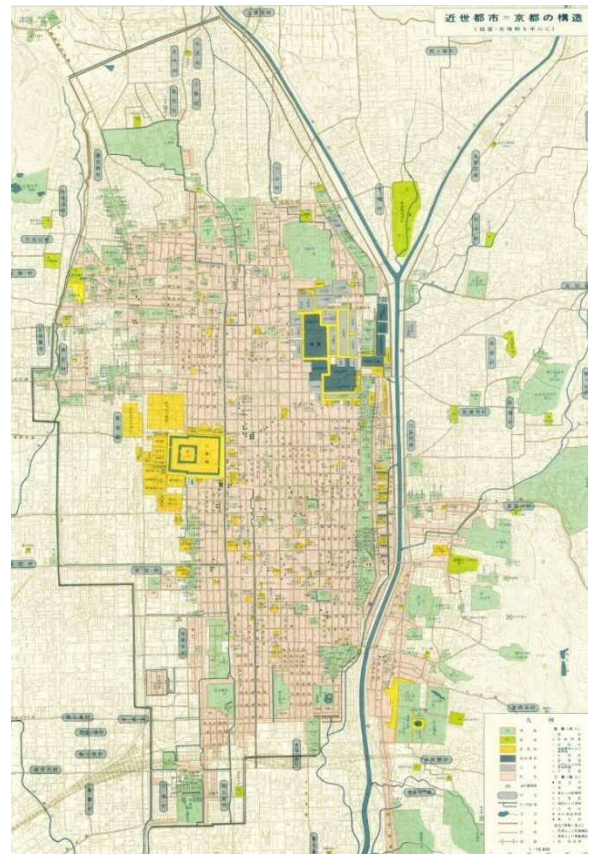


図1-11 延宝・元禄期を中心とした京都の様子 出典「京都の歴史5」



三十三間堂



豊国廟

図1-12 洛中洛外図屏風(舟木本)

(重要文化財) 部分東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives